

## 論文題目

〈他者〉への共感と対話

——エリザベス・ギヤスケルの小説における〈語り〉の可能性——

木村 晶子

## 主論文の要旨

本論文は、19世紀の英国の代表的な小説家のひとりであるエリザベス・ギヤスケル（1810-65）の作品における〈語り〉に注目して新たな解釈の可能性を探るとともに、厳格な性規範をもつヴィクトリア朝の女性作家ならではの創作の葛藤の軌跡を明らかにしようとしたものである。ギヤスケルの文学批評においては、20世紀半ばまでは主に労資関係を扱った「社会問題小説」を中心とした作品批評がなされてきたが、1980年代末期以降はフェミニズム批評の隆盛によって作家像の再構築の試みがなされ、その後も新たな批評理論や歴史・文化的視点に基づいて作品への多彩なアプローチがなされている。しかし、語り的问题に特化した批評としてはフェミニスト物語理論の提唱者による一部の作品の文体論的分析しかなく、本論文のように各作品の語り手や登場人物の言語表現に注目して、その主題を探りつつ作品全体を通時的に考察した批評は見られない。ギヤスケルの語りはそれまでのリアリズム小説の男性的キャンノンにおける語りの限界を意識するところから出発し、絶えず新たな語りの領域を模索してジャンルを越境し、最終的に独自の境地に到達したという仮説のもとに、ほぼ年代順に全長篇六作品と中篇二作品を三つのジャンルに分けて論じてゆく。

第一部「社会問題を描いた小説」で扱う初期の三作品では、階級制度や家父長制度の矛盾が日常生活の描写をとおして表現される中で社会的弱者への共感の重要性が訴えられている。愛する息子の死による鬱状態の克服を創作活動の出発点とするギヤスケルの文学には、自らの喪失感を〈他者〉への共感に変えることが自己の救済に通じるという信念があり、新たな語りの模索は他者への共感に基づく対話をさまざまな形で表現することでもあった。

第1章『メアリ・バートン』——〈語り〉の限界からの出発——では、ユニテリアン派牧師であるギヤスケルの夫ウィリアムの文学的教養と男性の文学キャンノンの影響を強く受けているこの最初の長篇が、公私両領域にわたる女性の自己表現・自己実現のあり方というギヤスケルの文学全体の主題の方向性を見出すことをたどってゆく。労働者の悲惨な現実がリアルに描写され、敵対する他者の悲しみに共感することで〈対話〉による救済がもたらされる中で、作品の主体は前半のジョン・バートンから娘のメアリへと移り、公的領域でヒロインが語ることの意味が探られている。しかし、全知の語り手の物語への介入や私

的な感情表現も見られ、ギヤスケルの作家としての成長はこうした過度の感傷性を示す語りからの脱却となってゆくと言える。

第2章「『ルース』——〈堕ちた女〉を語る」では、当時〈堕ちた女〉として社会から排斥された未婚の母をヒロインとするこの作品が、新たな語りの領域への果敢な挑戦であると同時に、そのヒロイン像の特異性にヴィクトリア朝の性規範に対抗する創作の限界も示されていることを明らかにする。ヒロインのルース・ヒルトンには過剰な善良さと聖性が与えられ、婚外子との母子関係が理想化されるが、最終的には自己犠牲的ヒロイン像は崩壊する。また、『メアリ・バートン』で描かれた〈罪の秘密〉というテーマが発展してヒロインの過去の隠蔽と捏造として描かれ、語ることの困難な女性のセクシュアリティが登場人物の言語表現の問題としてさらに探求されている。

第3章「『北と南』——〈死〉の表象と対話の可能性」では、『メアリ・バートン』同様に労資問題を扱いつつも、中産階級の主人公の成長と恋愛のプロットをとおして他者への共感の重要性が描かれている。数々の喪失体験をとおして愛する人々の死をどのように克服するかがヒロインの成長の指標となることに注目し、登場人物の死が彼女だけでなく多くの人物間に新たな対話の契機をもたらしていることを例証する。ヒロインのマーガレット・ヘイルは階級を超えた友情関係を築いて対話の仲介者となり、ギヤスケルの作品で最も自立した女性だと言える。その一方で、彼女の嘘が恋愛の成就の障害となることで、女性の自己表現・自己実現の困難さも示されている。第二部「歴史的事件を描いた小説」においては、ギヤスケルの関心は同時代の社会の矛盾から過去の悲劇的事件に移るが、ここでも中心となるのは家族関係のドラマであり、家庭の空間に囚われたヒロインは第一部の作品群以上に主体を奪われた悲劇的存在となっている。そこには、公的領域のできごとが女性の私的領域の日常と深く関わっているという20世紀フェミニズムに通じるギヤスケルの思想が読み取れる。ただ、ここで扱う二篇の小説のプロット展開や人物像にはいずれも過度な煽情性や作為性もあり、私的領域を中心として歴史的事件を再構築する困難さも露呈している。

第4章「『魔女ロイス』——史実とフィクション」では、17世紀末のニュー・イングランドのセイレム魔女裁判をもとにしたこの作品が、魔女裁判の迷妄を批判して理性の重要性を訴える歴史的資料に依拠しつつも、かつてヒロインの故郷で処刑された魔女の呪いの成就というゴシック的非現実性をもつことを読み解く。この作品における魔女裁判は抑圧された女性たちの〈語り〉に基づく〈言葉〉による悲劇として物語化されており、ヒロインの処刑が閉鎖的な家庭空間によって生み出された女性たちの悲劇として描かれていることを論じる。

第5章「『シルヴィアの恋人たち』——嘘と隠蔽という〈悪〉」では、18世紀末の強制徴募という国家権力の悪による悲劇において、登場人物の悪が他者との関係性における言語表現の問題として描かれることに注目する。かつての恋人の失踪に関する夫フィリップ・ヘップバーンの嘘と隠蔽を知ったヒロインのシルヴィアは夫を赦さないという誓いを

立てることで言葉の悪を反復し、作品における悪の重層構造を作っている。罪を償おうとするフィリップは極度の自己犠牲的行為の末、死の直前に妻と和解するが、ここでも対話が鍵となる。しかし、絶えず背景にある海の波音が無常の象徴となり、個人のあらゆる情念や善悪を超越して人物たちが記憶の彼方に消えてゆくことを暗示する。知的言語を獲得せず、男性の欲望の対象でしかなかったシルヴィアは最後まで悲劇的な存在でしかないが、密かにフィリップを愛するヘスタ・ローズが絶えざる自己犠牲と社会貢献によって日常のヒロイズムを実践することで救いがもたらされている。そこには第三部で扱う作品に通じる「日常」の重要性が見出せる。

第三部「日常生活を描いた小説」で扱う三作品は、ギヤスケルの小説の中で最も形式的完成度が高く、彼女の文学的特性に適した設定の作品群だと言える。階級制度や家父長制度の矛盾、共同体や国家の権力による悲劇ではなく、ヒロインの日常生活自体が中心となり、作者の心の故郷である田舎町や田園を舞台にして親族や知人という身近な他者への共感が表現されている。

第6章「『従妹フィリス』——パストラルを超える物語」では、この中篇がパストラルを意識したヒロイン像や田園讃美と失恋の主題をもちながらも、家父長制度における言葉の罪と女性のセクシュアリティの抑圧を描く小説となっていることを論じる。急速な工業化・都市化の中では田園ももはやアルカディアではなく、そこには鉄道技師ハウルズワスに恋をしたフィリス・ホルマンの失恋に象徴的な意味が見出せる。心変わりをしたハウルズワスの罪ではなく、彼の愛の告白をフィリスに伝えた語り手ポールの言葉の罪が強調される点は、他者への共感を表現することの困難さを示している。さらに、フィリスが父親に対してハウルズワスへの恋愛感情を告白せざるを得なくなって病に倒れる経緯には、女性が〈語れないこと〉が身体の病として表現されることが読み取れる。

第7章「『クランフォード』——物語としての〈日常〉」では、田舎町の中高年の淑女たちの日常をユーモラスに描いた作品の深部にラディカルなメッセージも見出すことができ、さまざまな両義性が存在するテキストであることを示す。そして、男性優位と女性優位の共存、淑女たちの偏見と寛容さ、保守性と革新性、変化と静止といった両義性に注目しつつ、物語化した過去の集積として日常が表現されていることを論じる。雑誌の断続的連載という出版事情によって数々のモチーフが反復する散漫なプロットは、むしろこのような日常の描写に適している。登場人物が次々に語り手に過去を語る形式には、時間のもたらす制約から私たちを解放する〈物語の力〉がある。最後に町の秩序を回復するのが、物語の名手として淑女たちを魅了する〈クイア〉な人物である点にも注目する。

第8章「『妻たちと娘たち』——〈語り〉の到達点」では、最終章を残してギヤスケルが急死したため未完ではあるものの、この作品が第一作とは大きく異なる円熟した〈語り〉の手法によってギヤスケルの小説の到達点を示すことを論じる。〈家庭の天使〉とは異なる新たな女性像・ヒロイン像が提示されているとはいえ、最終的には恋愛・結婚のプロットにおいて女性たちが伝統的性規範を超えることはなく、ギヤスケルが描く女性の自

己実現の限界も感じさせる。しかし、この作品では恋愛プロットが多様な社会階層にまたがる複数の家庭内のドラマと並置され、個々の日常が相互の関連性をもって有機的に機能する小宇宙を構築している。このような小宇宙において細部を観察するミクロな視点からマクロな社会像が形成される小説空間には、ダーウィニズムとの関連も見出すことができる。

個人的な喪失体験の克服を原点としたギaskellの創作行為は、自己の内なる感情ではなく外へ向かって〈他者〉への共感を求め、嘘・秘密・ゴシップなどの多様な言語表現の問題をプロットの要として、〈対話〉の可能性を探るものである。言語表現を奪われる弱者としての女性の立場を鮮明に描き出し、語られることのなかったセクシュアリティの問題を言語化したその功績は大きい。とはいえ、私的領域に限定されない女性の自己実現を求めながらも、社会問題や歴史的事件を主題にする小説で十分な社会的視点を持ち得なかった点は、ヴィクトリア朝の女性作家が直面した困難を示している。形式的破綻とも見なし得るジャンルの多様性や両義的・多義的なテキスト、登場人物の性別役割や階級の〈越境〉は、むしろリアリズム小説では語り得なかった女性の感性を表現する先進的な試みと捉えるべきであり、小説における新たな〈語り〉の可能性を示唆すると言える。